

---

# 理想王子

田山らら

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想王子

### 【Nコード】

N4390A

### 【作者名】

田山らら

### 【あらすじ】

もしもあなたの目の前に理想にぴったりの王子様のような男の子が現れたらどうしますか？そんな少女マンガのような夢のようなお話に巻き込まれる女子高生のお話です。

## カミナリBOY（前書き）

初めて書きました。ちょっと変でも許してください。  
感想くれたら嬉しいデス！

## カミナリBOY

もし目の前に自分の理想そのまま、一目見ただけでびびっときて、

恋に落ちてしまうような理想の王子様のような男の子が現れたらどうする？

〔みなみ 南 真子の場合〕

あたし、南 真子。16歳、高校一年。彼氏いない歴16年。

あたしは超恋愛無頓着女で、平気で男の子の前でも、下ネタを言うてのける。

もちろんクラスの男子はドン引きする。なので恋愛対象には絶対ならない。

それでも少なからず笑ってくれる男子もいるから、男の子と無縁ってわけじゃないんだけどね。

けどやっぱり友達止まり。それはあたしのファッションも関係してると思う。

派手め古着系アメカジ。世の男の子はミッキーのトレーナー着てる女の子よりも、

エロカワなキャミソール着てる子のほうが良いのだ。

聞いている音楽も、ゴイステやP i z z a o f D e t h系だ。

こんなロック少女に誰が恋してくれるだろうか。大塚愛も倅田クミも聞かないロック少女に。

もちろん恋には興味はある。したいとも思う。

でも相手がいない。自分に自身がない。

下ネタで笑ってくれる男子の恋の相談にはのれても、あたし自身も恋愛対象にはならない。

そう思っていた。あの子が現れるまでは。

ある晴れた月曜日、あたしはいつものようにふらふら歩きながら学校に向かっていた。

あたしは朝がものすごくよわい。

毎朝ふらふらしながら記憶飛ばし飛ばしで、学校に着く。

いつもは意識がはつきりしてなくても、気づいた時にはちゃんと自分のクラスの、

自分の席に座っていて、なんだ、あたし意外とやるじゃんなんて思いながら一時間目をつけるのだ。

今日もそのはずだった。が、

なんだか今日はふわふわしていて、地に足が着いてないって感じがしたんだ。

それもそのはずだ。だってあたしは気づいて起きたときには黒い背中  
の誰かにおんぶされていたんだもの。

あたしはびっくりして起き上がって叫んだ。

「うおわあああああ！」

「うおわあああああ！何々！？」

相手もびっくりして叫んだ。

「ちょっと！暴れないでくれます？俺、電車で倒れたあんたを、  
こうして親切にもおんぶして学校まで連れて行ってるんだから！」

よく見るとおんぶしてくれてるのは男子高校生で、彼の制服はまさしくうちの高校の学ランだった。

それに歩いている道も、よく見たら通学路だった。

「え・・・あ、すみません・・・あのあたし倒れました?」

「そうですけど。いきなり電車の中でバターンとね。親切にも（強調）転校初日の俺が、おんぶしてあげてたんですよ」

学ランの彼は、前だけ見て言った。

やべー・・・

直感的にそう思った。いや、直感じゃなくてもやばいと思うけど。

「あの、たぶん貧血だっただけだと思うんで、おろしてもらって大丈夫です・・・!すみません!」

申し訳なさそうにあたしが言うと彼は以外にも、

「いや、あんた倒れたわけだし無理しなくてもいいよ。こう見えても力持ちですから」

と言って、へへと笑った。



かなり優しくてびっくりした。男の子にこんな風に優しくされたことのないあたしは、顔を赤くしてしまった。

ただ相手は前をむいていたから見られずに済んだけど。

「いえっ！本当に大丈夫ですから！」

「あ、そう？大丈夫なら良いんだけど・・・じゃあ降ろすよ？」

よっ。といって、優しく降ろしてくれた彼を見てあたしは目ん玉がハートになった。

少女マンガみたいに。

だって彼はあたしの理想ぴったりだったのだ。

学ランに黒縁メガネ、ナイキのハイカットダנקのスニーカー、そして拡張されたピアス。

まさにロック少年。そんなべたな展開にあたしはクラクラして、

まさしく恋に落ちてしまったようだ。

「・・・あの？大丈夫？顔赤いけど？」

はっとわれに返り、相手を見た。

「あつ、えつ、そつ、そのっ！」

「ハイハイ、落ち着いて。まだ具合悪い？」

つか具合というより眠かっただけみたいなの・・・

「あ、大丈夫です！つかあの～転校生なんですか？」

「あ、そうなんだよ。ど田舎から転校してきました。藤田 ふじた 修馬 しゅうまです。ところでさ、あんた望高校の人だろ？一年八組の場所知らね？」

ビンゴ・・・！！それはあたしのクラスだったのだ。うわまじ？まさに少女マンガ！

「そ、それ・・・あたしのクラス！」

「あ、まじ？じゃあ案内してよ。お詫びにさ」

と言って笑った彼はこの街で一番格好良かったと思う。

それがあたしと修馬の出会いだった。

転校生修馬。(前書き)

やっと学校まで着きました！これからどんどん書いていきます！

## 転校生修馬。

携帯の時間を見るともう遅刻寸前だった。

担任のハッシーはもう来てしまっているだろうか。

「もうすぐ朝の出席をとる時間ですよ」

「あ、そんな時間かあ…つか敬語やめようよwタメじゃん。つかあんたの名前聞いてないんだけど？」

「そつえば助けてもらったのにも関わらず言って無かったや。あたし、南 真子です」

「南さんか。俺の新しいクラスメイトさんね。ところで南さんのクラスはどんな感じ？」

あたし達はちょうど学校の門をくぐったところでそんな話をしていた。

「そうだな…良いクラスだと思うよ。みんな仲が良いし、男子と女子の隔たり無いし。担任のハッシーも若くて、好青年で良い人だよ！それにしてもなんで転校してきたの？」

「ダメ？w」

ダメと聞かれても…

「だっ、ダメじゃないよっ」

はいむしろ大歓迎ですが。え

「本当に？じゃあ内緒」

この時はこの内緒の意味がよくわかって無かった。全てはこの言葉に隠されていたのに…

「ふん…あつ、こっちだよ」

やっと校舎に入って教室に着いた時にはもうハッシーが出席をとっているところだった。

戸を修馬が開けようとしたので、あたしは制止した。

「待って！急に藤田くんが入ってきててもみんなわーわーなってるさくなるだけだし、ハッシーにも知らせないと」

「そっか。頭良いね、南さん」

「だからちょっと待ってて」

あたしはそういうと教室の戸を開けた。

みんなの視線があたしに集まる。

「あー！真子だー！遅くなーい？」

「何してたんだよー！お前の下ネタがねえと一日がはじまらねえし！」

最初に叫んだのは麗奈<sup>れいな</sup>で次に叫んだのは下ネタで笑ってくれる恵太<sup>けいた</sup>だ。クラス中がどつと笑う。

「あはは……」

「なんだ南寝坊か？」  
ハッシーが聞いてきた。

間違っても倒れておんぶされてましたなんて言えない。

「いやあちょっとおゝそれよりハッシー、ちょっと……」

「ん？」

あたしはハッシーを連れ出した。

廊下で修馬はちゃんと待っていた。（当たり前だけど）

「ん？何組の生徒だ？早く教室行きなさい。で、なんだ南？」

にこにこしながらハッシーは何を勘違いしたのか修馬に注意してしまった。

「ぶw」

「ちょ、ハッシー！今日転校生くる日じゃない？w」

「え？なんで知ってるの？俺みんなに秘密にしてたのに！なんで？」

あたしは修馬を指差して

「これ、転校生だよ」

「ども。藤田っす」

そう修馬が言うとハッシーが、あっちゃーと一言言って謝った。

「そうか！お前が藤田か！ごめんな〜いや〜遅いから心配したよ！何かあったのか？」

ギクつとした。もし倒れたのがバレたら恥ずかしいし、遅刻した理由が知られてしまう。



「道に迷ったんです。そしたら南さんが案内してくれて」

あたしは耳を疑った。

修馬はまたしてもあたしを助けてくれたのだ。

かつこいい。かつこよすぎる。

「南が？えらいじゃないか！お前朝は意識飛んでるのになw道は教えられるのか。珍しいなあ」

「あはは…まあね…」

「じゃ、とりあえず教室入るかあ」

あたしはハッシーの後ろで修馬にそつと声をかけた。

「また助けてもらっちゃったね」

「別に気にすんなって」

そう言つて修馬は笑った。

「はい！みんな静かにー！いきなりだが転校生紹介するぞー」

教室中がざわめく。

「藤田 修馬君だ。青森から引越してきたそうだ。みんなわからない事があつたら助けてやってくれ」

あたしはその言葉を聞きながら自分の席に着いた。

「なあなあ〜なんでお前と転校生一緒に入って来たんだ？」

恵太が興味深々で聞いてきた。

「別にたまたまだよ」

「ふーん…」

「ね、それにしても藤田くんって真子のタイプそのまんまじゃない？」

麗奈がにやにやしながら言う。

「そ、そうかな？」

凶星だけどね。

「マジ？あの田舎っぺがタイプなワケ？」

恵太が修馬をバカにした。悪いけど恵太よりは修馬のほうが百倍優しい。

「あのねえ〜！藤田くんは！…」

でもここで優しいって言うっちゃったらなんでって聞かれるに決まっている。

「なんだよ？」

「な、なんでもねえよっ」

「変なやつ」

前を向くと修馬と目があつた。修馬はにこりとあたしに微笑んだ。

あたしの中で今までこんなにびびびつときちやつような人がいただらうか。

修馬が気になってしかたない。もっと、もっと話したい。

「青森から来ました。藤田 修馬です。よろしくお願いします！」

「じゃあ藤田は南の隣の席に着け」

「えっ、！」

またベタな展開かよっと思いつつ、心の中でガッツポーズしたあたしだった。

## 友達のキス（前書き）

遅くなってすいません・頑張っ  
て書いていきたいです

## 友達のキス

心の中でガッツポーズしてみたものの、隣を意識しちゃって授業に集中できない。

一時間目の現文の時間だって…

「あのさ、教科書見せてくれませんか？」  
って言われて。

「え、え、っ？！見せるの教科書？！」

だって教科書見せるのってガーって机くっつけて、超接近するってことじゃん！

どうしよう！

「え、？w」

するとあたしの後ろにいる麗奈が、くすつと笑って言った。

「真子、藤田くん教科書まだ持って無いんだよ。見せてあげなよ」

「あ、だよね…ごめん…」

「そんなに拒否られるとはねw」

と修馬が困ったように笑った。

「あの違っのっ！全然見せられるから大丈夫！」

と力を込めて言ったら、修馬がにゅと笑って、

「あそ?じゃあ遠慮無くw」

と言ってがっちり机をくつつけてきた。

あたしは真ん中に教科書を置いて見やすいように見開いた。

でも相手に緊張してるのがバレないように気を付けなきゃならなかった。

別に修馬とあたしがこの先どうなるって訳じゃないかもしれないけど、なぜか修馬だけは男の子として気になってしまう。

こんなベタな展開に結局一番どっぷりはまっているのはこのあたしだ。

久しぶりにドキドキしてる。

なんだか恥ずかしくて笑っちゃうや。

「コンコン」

修馬が突然机を叩いた。

「?」

あたしが口だけ動かして何?と言うと自分のノートにこんな事を書き始めた。

『俺の後ろの席の人、南さんの彼氏ですか?』

あたしは目を丸くして修馬の後ろをみた。見なくても誰かはわかってる。そこに座っているのは恵太だ。

向いた瞬間に恵太と自然に目が合う。

恵太も声を出さずに口だけ動かして『なんだよ』とふくれっ面で言った。

あたしは目を丸くしたまま前に向き直した。

なんで恵太とあたしが？

ありえない。

あたしは自分のノートに返事を書いて見せた。

『なんで？ありえないよ（笑）』

修馬はうーんと唸って返事を書き始めた。

回りは静かで（というか思い思いにみんな携帯いじったり、漫画読んだり、内職してるんだけどw）先生の声だけが響く。

『だって俺が南さんと話すとあの人、すごいにらんでくるよ』

ええっ？何それ…あたしと話すと、恵太が修馬を睨む？無い無い（笑）

元々恵太は血の気が多い性格だから、ただ単にガン飛ばしたただけかもしれない。

あいつ…いちいちケンカ売らなくて良いっつの。

『あいつバカだから気にしなくて良いよ』  
あたしはノートに書き続けた。

『そんな風には思えないけどなあ』

『え、思えないって何が?』

『自分で考えなよ（笑）』

キーンコーンカーン…

そんな事メモしながら話してたら授業が終わってしまった。（一番良いところで）

休み時間が終わると同時に修馬の回りにどわっと男子が集まり始めた。

ただし恵太は何が気に入らないのか教室を出て行ってしまったけど…

それをよそに修馬は回りの男子に質問攻めになっていた。

「青森って寒い?！」

当たり前だろ（笑）そんな当たり前前の質問にもちゃんと修馬は答えてあげてる。

「寒い寒い！下手したら死ぬよ！」



「じゃあさ、どこらへんに引っ越してきたの？」

そ、それはあたしも気になるw

「東望台だよ」

あたしと一緒にちゃん…またベタな展開だし…

「で、何部入るの？」

軽音かな？見た目ロックだしw

「んー中学からずっとバスケやってるから、バスケ部入りたいな」

「うおおおおっ！！」

バスケ部の男子が大袈裟なりアクションをする。

バスケ部か。意外だなあーバスケ部…げっ！恵太バスケ部じゃん…  
うわぁ…絶対ヤバイよ…

恵太に話したい事もあったのであたしは教室を出て恵太を探しに行った。

と言っても恵太が行くところくらいすぐにわかるんだけど。

あたしは階段を上がって屋上へ出た。

「おらーチクるぞー」

「うつせー」

そこには案の定煙草を吸っている恵太がいた。

「それでもスポーツマンかい」

恵太は煙を吐きながら笑った。

「いいの俺は。バスケうまいから」

恵太はバスケ部のエースだ。

「またそんな事言つて。だったらなおさら吸うなっつもの！」

「お前も俺が吸ってる理由知ってんだろ」

「まあね」

「だったら止めんなし〜」

恵太が煙草を吸ってる理由はあたしも知っていた。

恵太はお母さんとソリが合わずで家で息が詰まってしまうらしく、そのストレスの吐け口に煙草を吸っているのだ。

「あのさ、藤田くんにガン飛ばしてるっしょ」

「あゝあ？」

恵太があたしを睨む。別に怖くないけど。

「恵太、そんな顔してるとジュノンボーイ級の顔が台無しだよ」

「なんで俺があんな田舎っぺにガン飛ばさなきゃならねえんだよ！」

「別に飛ばしてないって言うなら良いけどさ、藤田くん、バスケット部入るって言うから先が不安だね」

明らかに恵太が嫌な顔をしている。「何、なんか文句あるの？」

「別に〜ねえけど〜？」

超ありますって顔してんじゃんかよ。

「本当に〜？」

あたしがいぶかしげに聞くと、じつとあたしを見つめて恵太は黙ってしまった。

あたしは見つめ続けられるのって苦手だから、先に話した。

「なにっ！」

「お前はあいつの前だと女の子になる」

マジ顔で恵太は言った。まるで確信しているような自信たっぷりな顔で。

もちろんその通りだったけど、ここは否定するに決まってる。

「は？何言ってるの？あたしが？意味わかんないなあゝあたしそういうキャラじゃないじゃん。くだらない事言っただったらもう授業はじまるし、あたし行くからね」

意外にもさらりと言えたと思う。嘘なんて言っつの簡単なんだ。

「嘘つくな」

恵太は引かない。

「ついてない！もう良い、勝手にしなよ」

あたしは屋上の出口へと早歩きで向かった。

「おい！待てよ」

シカトしてあたしは歩くもつすぐ階段だ。さーっと格好良く降りて、恵太なんて無視してやる。

「待てって！おい！」

恵太の声が強くなる。

あたしは気にせず歩くが、追いかけてきた恵太に腕を取られてしまった。

「離せ！痛い！」

あたしがわめくと壁にあたしを恵太が押し付けた。やっぱり男の子

の力には勝てない。あたしは意図も容易く壁に半ばぶつけられた。

「…っいった…」

「言うこと聞かないからだ」

「近い。離れて」

あたしと恵太は近すぎて気持ち悪いくらいだった。まるで恋人同士みたいに。

「真子はいいつが好きなんだ？」

また恵太が確信をつく。

「違うって言うてんじゃん！しつこいんだけど！たえそうでも恵太に関係ないっ…んっ！」

そう言った瞬間恵太にキスされた。

しかもディープ。はねのけたいのに向こうの力が強くて動けない。

「は…離してっ…」

そうあたしが涙ぐみながら小さい声で訴えると、恵太はキスをやめた。けど顔が近くて向こうの吐息が聞こえるくらいだった。

「関係あんだよ…俺は真子が好きだから…」

「ごめん、どいて」

言った瞬間にあたしは恵太を押しつけて、とにかく走った。

なんで？なんで？

恵太は友達じゃないの？

なんでキスできるの？

恵太があたしの事を好き？意味がわからない。だって恵太には彼女がいるじゃん。

そうなのだ。恵太には彼女がいる。なのになんで？

悲しいのか悲しくないのかわからないけど、涙が出てきて拭いながら教室まで走った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4390a/>

---

理想王子

2010年10月10日03時10分発行